か。フサイン・ハイカルの書が「マホメット伝」の「科学的歴史研究」の端緒であるとしても、その後四十年をへた今日でも、アラブ世界での「マホメット伝研究」は進展していない。その原因は何であるかを、本書は何も語らない。このような弱点をもつとはいえ、本書は興味深い研究書である。何よりも、現代に生きる人々が好む「マホメット伝」を古典と比較するという着想が優れているからである。

(Antonie WESSELS: *A Modern Arabic Biography of Muḥammad, a critical study of Muḥammad Husayn Haykal's "Ḥayāt Muḥammad,"* Leiden, 1972, xii+272 p.)

トルコ民族世界ハンドブック

護　雅夫

まず、本書の構成、執筆者、内容を示すと以下のごとくである。

序文。第一篇　トルコ〈テュルク〉民族居住領域の地理。はしがき　トルコ民族の原住地、分布地域。Ⅰ　アフメト-アルデル(Ahmet Ardel)、トルコ民族居住領域の自然地理。Ⅱ　ユスフ-ドンメズ(Yusuf Dönmez)、トルコ民族世界の人文・経済地理的概観。Ⅲ　アフメト-アルデル、ターリプ-ユジェル(Tâlip Yücel)、バルカン半島、シリア、イラクにおけるトルコ民族居住領域とキプロス島との人文・経済地理。

第二篇　トルコ文化の基礎。Ⅰ　トルコ語。A　ウラル-アルタイおよびアルタイ語。1　アフメト-テミル(Ahmet Temir)、ウラル-アルタイ語学説。2　タラート-テキン(Talât Tekin)、アルタイ語学説。B　トルコ語の諸方言。はしがき　R-ラフメティ-アラト(R. Rahmeti Arat)、トルコ民族の言語。1　シイナスィ-テキン(Şinasi Tekin)、古代トルコ語。2　西部トルコ語。a　ファルク-K-ティムルタシュ(Faruk K. Timurtaş)、古代アナトリアートルコ語。b　ムハッレム-エルギン(Muharrem Ergin)、オスマン語。c　同上、アナトリアのトルコ語。3　同上、東部トルコ語(チャガタイ語)。4　アフメト-テミル、北部トルコ語。5　R-ラフメティ-アラト、アフメト-テミル、トルコ語諸方言の分類。6　ファルク-K-ティムルタシュ、トルコ語主義潮流史。7　ムハッレム-エルギン、トルコ民族における文字・アルファベット。8　アフメト-テミル、トルコ諸方言。Ⅱ　トルコ文学。1　アブデュルカディル-イナン(Abdürkadir İnan)、トルコ民族の叙事詩。2　サアデト-

チャアタイ（Saadet Çağatay）、イスラム以前におけるトルコ文学。3　アフメトージャフェロウル（Ahmet Caferoğlu）、カラハン国家時代のトルコ文学。4　ファルクーKーティムルタシュ、アナトリアの文学。5　アフメトージャフェロウル、アゼルバイジャンの文学。6　アブデュルカディルーイナン、チャガタイ文学。7　アフメトーテミル、キプチャク文学。8　同上、北部トルコ民族文学（タタールーバシュクルト）。9　シュクリューエルチン（Şükrü Elçin）、アナトリアの民衆文学。10　ケナンーアクユズ（Kenan Akyüz）、現代トルコ文学。Ⅲ　トルコ芸術。オクタイーアスラナパ（Oktay Aslanapa）、トルコ芸術。ミュジュギャンージュムフル（Müjgân Cumhur）、トルコ民族における書物装飾芸術。同上、トルコ民族における装釘芸術。

第三篇　トルコ民族史。はしがき、イブラヒムーカフェソウル（İbrahim Kafesoğlu）、「テュルク」という名称、トルコ民族の種族的帰属、トルコ民族の原住地・領域拡大。Ⅰ　アジアにおけるトルコ諸国家。1　同上、匈奴（フン）帝国。2　同上、タブガチ（拓跋）国家。3　同上、突厥可汗国。4　同上、ウイグル。5　同上、キルギズ。6　同上、突騎施。7　同上、カルルク。8　オグズ。Ⅱ　アクデスーニメトークラト（Akdes Nimet Kurat）、東ヨーロッパのトルコ諸族・諸国家。Ⅲ　イブラヒムーカフェソウル、文化と組織。Ⅳ　初期のトルコーイスラム的政治組織。1　同上、トルコ民族のイスラム改宗。2　同上、アッバース朝時代のトルコ民族（エトラーク）。3　エルドアンーメルチル（Erdoğan Merçil）、カラハン国家。4　イブラヒムーカフェソウル、ガズナ国家。Ⅴ　セルジュク諸国家。1　同上、大セルジュク帝国。2　同上、イラクおよびホラサンのセルジュク国家。3　同上、キルマンのセルジュク国家。4　同上、シリアのセルジュク国家。5　Hードゥルスンーユルドゥズ（H. Dursun Yıldız）、アナトリアのセルジュク諸国家。Ⅵ　中東に建設されたトルコ諸国家（アナトリア、イラン、シリア、エジプト）。1　イブラヒムーカフェソウル、東部アナトリアおよびイズミルのテュルクメン諸侯国。2　同上、アタベグ諸国家。3　エルドアンーメルチル、アナトリアの諸侯国。4イブラヒムーカフェソウル、デリーのトルコーサルタナト。5　MーCーシェハベッディンーテキンダア（M. C. Şehabeddin Tekindağ）、エジプトとシリアとに建設されたトルコ諸国家。6　イブラヒムーカフェソウル、ハーリズムシャー国家。7　同上、カラーコユンル（黒羊朝）国家。8　同上、アクーコユンル（白羊朝）国家。Ⅶ　同上、イスラムートルコ諸国家における文化と組織。Ⅷ　内陸アジア・キプチャク諸平原に建設されたトルコ諸国家。アフメトーテミル、はしがき。1　同上、トルコーモンゴル帝国とその後継諸国家。

2　アクデスーニメトークラト、キプチャクーハン国。3　アフメトーテミル、カザンーハン国。4　Rーラフメティーアラト、アストラハンーハン国。5　アフメトーテミル、カスムーハン国。6　ハリルーイナルジュク（Halil İnalcık）、クルムーハン国。7　アフメトーテミル、ノガイーハン国。8　アクデスーニメトークラト、アフメトーテミル、スィビル（シベリア）ーハン国。Ⅸ　イブラヒムーカフェソウル、一四世紀以後内陸アジアに建設されたトルコ諸国家。Ⅹ　オスマン帝国。1　ハリルーイナルジュク、オスマン帝国における文化と組織。2　Fーチェティンーデリン（F. Çetin Derin）、オスマン国家政治史。3　エルジュメントークラン（Ercüment Kuran）、オスマン帝国における革新運動。Ⅺ　ジェンギズーオルホンル（Cengiz Orhonlu）、トルコ共和国史。

第四篇　今日のトルコ民族世界。Ⅰ　西部トルコ民族。1　同上、トルコ共和国のトルコ民族。ネジャトーギョユンチ（Nejat Göyünç）、トルコ共和国における教育。2　ターリプーユジェル、Hーフィクレトーアラシヤ（H. Fikret Alasya）、キプロス島のトルコ民族。3　ビラールーシムシル（Bilâl Şimşir）、ブルガリアのトルコ民族。4　ミュステジプーウルキュサル（Müstecip Ülküsal）、ルーマニアのトルコ民族。5　シェラーフェッティンーユジェルデン（Şerâfettin Yücelden）、ユーゴスラヴィアのトルコ民族。6　ジョンギズーオルホンル、ギリシアのトルコ民族。7　アフメトージャフェロウル、北部アゼルバイジャン。8　アフメトージャフェロウル、ターリプーユジェル、南部アゼルバイジャンおよびイランにおけるトルコ民族。9　アフメトージャフェロウル、コーカサスのトルコ民族。10　ネジメッティンーエスィン（Necmettin Esin）、イラクのトルコ民族。11　ジェンギズーオルホンル、シリアのトルコ民族。12　ムュステジプーウルキュサル、クリミアのトルコ民族。Ⅱ　中部・東部トルコ民族。1　エルドアンーメルチル、アフガニスタンのトルコ民族。2　イブラヒムーヤルクン（İbrahim Yarkın）、西トルキスタン。3　・Iームサバイ（İ. Musabay）、Pートゥルファニー（P. Turfanî）、東トルキスタン。Ⅲ　1　アフメトーテミル、ヴォルガーウラル地方とその隣接地域。2　アブデュルカディルーイナン、シベリアのトルコ民族。

第五篇　トルコ民族世界の今日の諸問題。Ⅰ　政治的諸問題。1　アクデスーニメトークラト、アフメトーテミル、ロシアにおけるトルコ民族とイスラム。2　アフメトーテミル、トルコ民族とソヴィエトーロシア。Ⅱ　社会的・経済的諸問題。1　セルチュクーオズチェリク（Selçuk Özçelik）、アナトリアにおける法律の進歩・発展。2　ターリプーユジェル、アナトリアの経済地理。3　メフメトーエロズ（Mehmet Eröz）、トルコ民族世界の社会的・経済的諸問題。4　ケマ

ルーロクマン（Kemal Lokman）、ヴォルガーウラル地方の経済的現状。Ⅲ　文化的諸問題。1　アフメトーテミル、アナトリア以外に住むトルコ諸族の言語と文字。2　ルザーカルダシュ（Rıza Kardaş）、トルコ民族社会における宗教生活。3　イブラヒムーカフェソウル、トルコ民族文化の維持と発展。

略号、索引、地図一葉。

以上によって明らかなように、本書は、地理にはじまって、言語・文学・芸術・歴史、現状、はては、今日の諸問題にいたるまで、全世界に居住するトルコ（テュルク）民族――約一億三千万人――に関するほとんどすべての事項を概説したものである。読者は、これを一読することによって、各項目にたいするトルコの学者たち――少なくとも執筆者たち――の意見を知りうるであろう。その意味では「ハンドブック（El Kitabı）」の名にふさわしい。しかし、本書は、天地二八センチ、幅二〇センチの大型本で、一四五二ページにのぼり、持ち運びはおろか、閲読にもはなはだ不便である。上掲のごとき事項を網羅するにはこの程度の量は必要であろうが、たとえば、Handbuch der Orientalistik の如き形で分冊出版される方がのぞましい。事実、トルコの研究者・学生たちも、本書のそうした不便さを訴え、これをバラして、必要な個所だけを整本しなおしているものが多かった。ちなみに、イブラヒムーカフェソウル教授（イスタンブル大学文学部トルコ民族史・アジア史学科主任教授）が、本書における執筆個所の大部分に大きく加筆したうえ、『トルコ民族文化（Türk Milli Kültürü, Ankara, 1977）』として公刊していることをつけ加えておく。このカフェソウル教授の著書については、いずれ機を見て私見をのべるつもりでいる。

つぎに、本書を読むに当たって、注意すべき点は、本書を出版した「トルコ文化研究所（Türk Kültürünü Araştırma Enstitüsü）」が、「中道左派」の共和人民党内閣時代に一時閉鎖されていたことからもわかるように、本書の執筆者のうちかなり多くの人々が、極端な民族主義者で、トルコでいわゆる「右翼」、いなむしろ「極右」にぞくしていることである。そうした傾向は、当然といえば当然ながら、歴史と今日の諸問題とをあつかった個所に、とくにいちじるしく看取される。私が、さきに、「読者は、これを一読することによって、各項目にたいするトルコの学者たち――少なくとも執筆者たち――の意見を知りうるであろう」と書いたのは、そのためである。執筆者のなかに、アフメトーテミル教授（アンカラ大学言語・歴史・地理学部トルコ学科モンゴル語教授、「トルコ文化研究所」前所長）をはじめ、故国を追われ、または自ら去った、いわゆるタタール人――それらの人々がすべて「右翼」「極右」であるというわけではないが――が多

いことも、上述の点とまったく無関係ではあるまい。

序文によると、「本書の出版は一九六四年に計画され、プランにしたがって、各項目が関係者に配布されたのち、一九六六年以後、原稿が集められだした」という。これだけ大部の書物の出版に要する期間としては、二年という年月はけっして十分ではない。そのためでもあろうか、誤植をはじめ、目次と本文との間の相違、文献目録の精粗の甚だしさなどなど、訂正・改善を要する個所が少なくない。これは、編集者・執筆者もつとに気づいているところで、編集委員会のメンバーの一人、アフメト-テミル教授のもとには訂正原稿が集まり、同教授は目下、それらを閲読中であるし、また、カフェソウル教授は、私に、『トルコ民族文化』の方が正しくて、文献目録も整備されているから、そちらを読んでほしい」と語った。本書がよそおいを新たにして出版される日をまちつつ、この紹介の文章をおわる。

(Türk Dünyası El Kitabı (Türk Kültürünü Araştırma Enstitüsü Yayınları: 45, Seri: I—Sayı: A5), Ankara, 1976, 1452 p.)